

ザ・ボイスメール 5月号

### ロック式運河を通過する

まさか20数年前にパナマ運河を通過したときの光景が再現されるとは予期していませんでした。ナイル川の中流。ルクソールからアスワンに向かう途中、クルーズ船はロック式運河を通過したのです。船がぎりぎりを通れる幅16mのロック。川の落差を縮めてゆるやかな流れにするためのものです。原理はパナマ運河とまったく同じ。下流から進んできた船がロックに入ると、後方の水門が閉められ、ロックの中には上流から管で水が流れ込み、徐々に水位が上がっていきます。そして、ロックの中の水位が上流の水位と同じになると、前方の水門が開いて船は前へ進んでいくのです。上流から下流へくだる時には、この逆の仕組みで通過します。

夕方5時。水門の前にはなんと20隻あまりがロック通過の順番待ちを始めました。すると、船の周りでは、なんとも愉快的な“行商”が始まったのです。船の5階にあたる甲板にいと、下のほうから「アロー、アロー」と大声が聞こえてきました。デッキの手すりから下を覗いて見ると、なんと、ボートに乗ったエジプト人がデッキめがけて何かを投げ上げています。別のボートでは民族衣装やカラフルな敷物を、デッキから覗いている人々に向かって広げている。交渉が成立すると、その“商品”をビニール袋に入れて下から投げ上げるのです。ボートからデッキまでの高さは10メートル弱。10回に1回の失敗はあってもほとんどが成功しています。

よくぞ正確に届くものだと、感心していると、品を受け取った“客”は、入っていたビニール袋に代金を入れて投げ返しています。でも、こちらは慣れない客の一投です。ときどき、めがけたボートから外れ、袋は水上に落ちてしまいますが、それでもビニール袋なので、沈む前にサッと拾い上げる行商人の腕前はたいしたもの。なんともスリルに富んだ、乗船客にも楽しいやりとりでした。

夜7時過ぎ。順番待ちをしていた私たちの船も夕闇迫るロックを通過しました。水門の扉が開き進んでいくところは、パナマ運河でも体験しましたが、なんと経験しても感動的ではありませんね。

船はハトホル神殿、コモ・オンボ神殿といくつも遺跡を訪ねていきます。どの遺跡の壁にも無数のレリーフやエジプト文字が刻まれています。こちらがガイドにいくつかの質問の後で、今度は彼が逆に質問をしてきました。アスワン生まれのひげの濃い彼はいたずら顔で言ったのです。

「正解だったら1ポンド(約20円)あげます」という。面白い！よし、どんな質問で受けて立とう！

質問：「遺跡のいたるところに描かれている人物像はすべて横を向いています。正面を向いた絵は全くありません。いったい、なぜでしょう？」

なるほど、Good question だ！レリーフの描かれた壁の前で思いをめぐらすもなかなか思いつきません。頭をひねっている間に、後方を各国からの観光客が賑やかに歩いていきま

す。英語、スペイン語、ドイツ語、中国語・・・多様な言語のガイドの声が聞こえてきます。こちらの彼(ガイド)は英語です。カメラを手にしたまま、しばらく考えたが思いつきません。「降参だよ！」。

と、ガイドは言いました。

“Look at the pictures well. They are facing and talking each other”.

絵をよく見てください。話し合うために向かい合っている、つまり「対話」をしているというのです。

なるほど、なるほど・・・。

土産品店の前を通ると、売り子たちが次々と寄ってきました。「コンニチハ！」「ワンダラー、ワンダラー」「ヤスイ、ヤスイヨ」・・・連日の数多い日本人観光客用に覚えた商売用の日本語と英語なのでしょう。つきまとって離れようとしません。それらの品の中で私も「古代の神々の一覧」との小冊子に興味をひかれました。神殿めぐりでいっぱい出てきた神の名前と意味を確認するのに役立つかもしれない、と思ったからです。

「1冊3ドル」だという。円高の今では300円以下です。観光地での値段からしたらそんなに高くはない。それでも「言いなりの値段で買ってはいけない」と事前にアドバイスを受けていたので、渋っていると売り子は2ドルに下げてくださいました。財布をみると50ポンド(約1000円)紙幣2枚と10ドル紙幣3枚、1ドル紙幣1枚しかありません。ここで50ポンドまたは10ドルの大きなお札を渡したら、ちゃんとお釣りがもらえるかどうか心配です。

再び渋っていると「じゃあ、1ドルでいいよ！大サービスだ！」と。なんと最初の値段の3分の1。私は少年に1ドル紙幣を手渡し品を受け取りました。

そういえば、その前に訪れた土産品店では、胡弓のような民俗楽器を「50ドルで」、と声をかけられました。興味もないし、品質の保証もないのはわかっているので、無視して歩き続けると、売り子は「25ドル」、「20ドル」、「10ドル」と下げてくださいました。そして、とうとう「じゃあ5ドルにするから持ってって！」となった。なんと最初の10分の1。

もちろん、それでも買いませんでしたが、なるほど、日本人旅行客へのアドバイスは、まさに的を得ていたのです。

### アスワンハイダムとアブシンベル

アスワンハイダムへ向かいました。「アスワンダム」——中学校時代に教科書でも習いました。あれから半世紀、今その現場に立っていると思うとちょっとした感慨でした。ダムの上は観光バスも通れる幅の道路があり、長さ3800m、高さ111m。最水深点は500mといます。琵琶湖の7.5倍といわれ、世界最大の人造湖です。

1970年、時のナセル大統領が、治水・灌漑・電力供給等の観点からダム建設を進めた。当初、IMFに貸付金を申請するも却下され、あちこちと当たった結果、当時のソ連が資金援助をしてくれることになった。こうしてその電力は隣りのスーダンにまで輸出されるようになった。ときには荒れ狂うナイルをなだめ、沿岸の田畑を潤し生活用水を供給、更に電力供給は他国まで潤すことができるようになったのです。

湖底に沈むことになったヌビア族はアスワンの町の近辺に移住。アブシンベルの遺跡も、水中への埋没を救うためにユネスコが協力、遺跡をブロックに分割し番号を付けて移動。もとの位置より 60m上に、すべてを同じ状態に復元するという“大移動作戦”を展開したのでした。

そして今、ナセル湖のほとりにある巨大神殿アブシンベルの前に立つ——なんと壮大な権力の象徴かと私は思いました。ラメセス 2 世は小さな岩山の側面に自分と妻(妃)そして家族の巨大な像を刻ませた。神殿の内部には、これも巨大な 8 体の石像。そして極めて精巧で芸術的な壁画がすべての部屋に刻まれていた。その壁画も、自分の戦いの勇姿や神への祈りをささげているものなど、すべて“力”を象徴しています。

それにしても、現代に残る世界の史跡の相当部分が、そのときの権力者につながっている事実は、民主主義を標榜する「今」という時代に考えさせられることが多いものです。

日中、訪れた神殿を、夕闇迫る午後 6 時少し前、再び訪れました。空には一番星がキラキラと輝き始め、真上にはクルーズ船のデッキで見上げた半月が、かなり丸みを増して白く輝いています。神殿から 200mほど前方のナセル湖岸には、300 人あまりを収容する石の長いすが並んでいる。これから「音と光のショー」が始まろうとしているのです。

この日の第 1 回目のショーは日本人が圧倒的に多いことから、神殿に向かって左側を日本人専用席にし、右側には各国からの観光客が座ることとなりました。そして右側の全員が自国語で流れるアナウンスを聞くためのヘッドホンを用意していた。2 回目は英語がメインとなり他言語の人がヘッドホンを使うのだといいます。

すっかり暗くなった午後 6 時 15 分。巨大な音響の音楽と日本語のナレーションと共に、神殿とバックの岩山をスクリーンにした映像が次々と映し出されていきました。透明にのびるナセル湖と夕暮れの砂漠に響く大音響——。タテ 50m、ヨコ 500m ほどもあるかと思われる岩山に描かれる大絵巻のショーはさすがに圧巻でした。ライトアップされた神殿は昼間とは違って幻想的で神々しささえ漂わせていました。